

**「移植医療臓器提供の真実：臓器提供では、強いられ急かされバラバラにされるのか」**

吉開 俊一 著 文芸社 2013年5月発行

私が高専生のとき、バイト先のS主任に誘われて、よく焼肉屋に行きました。その焼肉屋は、普通の焼肉屋にあるカルビやサガリがありません。選べるのは、ハツ（心臓）やシビレ（膵臓）という、いわゆる内臓です。それも刺身で出てきます。採血するだけでも気分が悪くなる私ですから、当然ハシが進まず、当時は栄養失調のように痩せていました。バイト先のS主任は、俳優の田村亮（田村正和の弟）に似てイケメンなのですが、嗜好のすべてがグロテスクな人でした。

それから時は流れ、5年ほど前、私は旭川医大との研究連携で、臓器移植装置の開発チームに入りました。まずは、旭川特産「大雪さんろく笹豚」の肝臓摘出手術を見学しました。人間同様、麻酔科の医師が生きている豚を眠らせて、外科の医師が開腹します。豚には人間の手術同様にいろいろな管が差し込まれて、心臓がドクンドクンとしています。開いた瞬間、腸がドバツと出てきて、その時、S主任を思い出してしまったのです。

前置きが長くなりましたが、この研究のために最初に読んだ本が、今回紹介する「移植医療」です。著者の吉開俊一さんは現役の脳神経外科医です。この本では、移植医療の背景や種々の問題点分かりやすく記述されていますが、かつて臓器移植反対派であった吉開医師が、理解派へと転身する瞬間は感動的です。臓器移植に関わる医療関係者が、いつ心停止になるか分からないドナー（臓器提供者）の死に備えて、通常の激務をこなしながら昼夜スタンバイしているくぐりには、頭が下がります。日本のドナーは毎年120人程度、米国の8,000人以上と比べると、その少なさに驚きますが、韓国や台湾と比べても圧倒的に少ないのです。私は慌てて、運転免許証裏の臓器提供欄にサインしました。心臓、肺、肝臓、腎臓、膵臓、小腸までは良かったのですが、最後の眼球だけは×にしてしまいました。あの世に行って、目が見えなくなるのがこわかったのです。

その後、私はドナーの家族やレシピエント（臓器受容者）から話を聞く機会があり、自然と流れる涙とともに、命をつなぐ移植医療の大切さを痛感しました。スペインをはじめとした欧州8ヶ国では、臓器提供が当たり前の「オプト・アウト方式」を採用して、多くの命が助かっています。それに対し、日本では・・・といろいろと考えさせられました。